

## ラオスにおける高地民の移住と生計戦略

中辻 享 氏 (福島大学 人間発達文化学類)

ラオスの山地部では盆地や河川沿いなどの低地で重点的に農村開発を行い、周辺のアクセスの悪い高地の住民にも移住を奨励するという、低地中心の農村開発・集落再編政策が進められてきた結果、農村内部での高地から低地への人口移動が顕著にみられる。一方、高地民の主要な生計手段である焼畑やアヘン栽培に関しては禁止や抑制の方向が強められ、その代替農業として水田や常畑経営など、低地民同様の土地利用が奨励されており、これも低地への人口移動が増加する背景となっている。

本発表では、これまで発表者が調査を続けてきたルアンパバーン県シェンヌン郡カン川流域を事例として、まず、このような低地への人口移動がラオス内戦期(1960~70年代)からみられたことを示す。次に、現在も残る高地村落と、高地民が移住した低地村落の土地利用と世帯経済を比較し、移住が必ずしも豊かさをもたらすとはいえないことを明らかにする。さらに、このような状況の中で、彼/彼女らが出作り集落の経営、幹線道路からのびる支線の造成などにより、高地と低地双方の良さを活用しようとする生計戦略を採っていることを示したい。